

聖德太子の頓悟思想

渡部 孝順

聖德太子の佛教の源流と想定されてをります南北朝時代には、既に、頓、漸、不定の三種教相が成立してをったと傳へられ、剩へ不定教としての勝曇經に、太子が御註釋遊ばされてゐるのでありますから、少なくとも、勝曇經義疏には、この問題にお觸れになつてをられるであらうと、期待されるのが當然です。所が、それらしいと思はれる言葉すら見出す事が出来ないであります。

そこで、太子がこの問題にお觸れになつてをらなかつた理由を、結論から申し上げる事にしますと、既に成立してをったと傳へられてゐる三種教相は勿論の事、頓漸の二教すら實は成立してをらなかつたであらうと云ふ事です。その理由としまして、第一、天台三論の系統、慧遠の大乘義章等に見ゆる所傳が、夫々相違してゐる事、第二、吉藏の法華玄論と三論玄義、そして勝曇寶窟に記する處、同一人にして夫々相違してゐる事、第三、現存する梁時代の例へば法雲の法華義記、明駿撰の法華經集解等に、この教相の事は全く見られないと云ふ事、以上の三つを挙げ得るのであります。今、ここには大般涅槃經集解に記されてゐる僧宗の説と、吉藏の無量壽經義疏のものを比較する事に依り、右の三つの理由の總括りとしてをく事を宥して頂きたいのです。

大般涅槃經集解（p.301 中）

僧宗云

(一) 自唐苑一至靈鷲四時次第（下根）

(二) 偏方別教……大雲經勝曇經（上根）

三種教相と云ふ立派な教判を知つてゐる筈の吉藏が、何故、僧宗の説を此處に引用したものか全く不可解である事、そして兩者は同じ事を述べてゐる様ではありませんが、實は、非常に相違してゐる事であり、僧宗は、節く迄も上根下根の爲めに設けたものである事です。

そして、この頓漸の兩思想が上根下根の爲めのものである事は、法雲の法華義記も、矢張り同じであり、太子もこの傾向を承け繼がれた事は法華義疏に伺ひ得る所であります。即ち、頓悟、漸入の思想は既に成立してをったのであるが、傳へられるが如き三種教相と云ふ組織だてられたものは、未だ出來あがつてをらなかつた、從つて太子が三種教相の事は勿論、頓漸の二教すら御存知なかつた事は當然でありませうし、知つてをりましたのは、頓教ではなく頓悟と云ふ思想であつた譯であります。そしてその代表經典として取り扱はれて來たものに勝曇經があり、その勝曇經の御製疏に、太子の頓悟思想を伺ひ得ると云ふ事も當然であります。それが亦、太子の維摩經義疏にもその一端を伺ひ得るものがあります。そして、頓悟思想の大體の内容と云ひますと、左に示す通りであります。

無量壽經義疏吉藏撰（p.116 下）

夫論如來說法不過二種

(一) 次第

(二) 偏方（偏方別教）

勝曇寶窟

慧遠撰維摩義記（卷中）

太子釋維摩經義疏

(一) 漸 廻小入大

(一) 漸入 大從小入

(一) ……………

(二) 頓 直往菩薩

(二) 頓悟 大不由小

(二) 明…無…小有…大

太子の場合、少しく不充分で、而も肝心の勝曇經義疏には、この

考へ方は見えてをりません。斯うして見ますと、太子の頓悟思想は實に素朴なものであり、隋唐以前の影響に有つた事は否めない様であります。この意味に於て、大般涅槃經集解に見ゆる一時釋と、太子の一時釋とを比較して見る事は決して無意味ではなく、而も頓悟的な解釋でもありますので左に引用して見ました。

太子釋勝鬘經義疏

大般涅槃經集解(p.384上)

一時者、明如來所說經教其數
無量而阿難得佛覺三昧一時皆
領故云一時

太子の釋は素朴ではありませんが、その反面、非常に力強いものを感ずる場合が多く、例へば攝受正法章には「爲佛何難」と云ふ一句が見出されるのでありますが、斯うした言葉は寶窟には見えてをりません。その他、太子が頓悟的な解釋を遊ばされてをりましても、寶窟は必ずしもさうでないといふ場合も屢々見受けられます。

經典 太子釋

寶窟(p.11上)

志速解法 一聞即悟不待再教
心得無疑 神情開即無小乘疑

滯也

明開法能解也
前若已得小乘之信於大乘之理未解
今報得大乘之信必離小乘之疑

右はその一例に過ぎませんが、とに角、太子の頓悟思想は、寶窟より強靱なものを感じることが多く、それだけに素朴なすがたをもつて見受けられるのであります。太子は、後世傳へるが如き、三種敎相の不定敎や、頓敎としての勝鬘經として、この經に對決したものではありません、單に頓悟思想の一面を持てる勝鬘經として、この經を取り扱ったものの如くであります。

却說、太子の頓悟思想が、如何に素朴なものであつたにしろ、何

等かの理論は有つたであらうと思はれるのでありますが、この問題に入る前に、太子の佛敎、謂はば、三經義疏を通じて共通な、而も根本的なもの、即ち萬善成佛の善の問題から入らなければならぬ様です。この萬善と云ふ事は、太子の法華義疏總序に依りますと、一因と成るべき筋合のものであり、この點より推しまして、漸悟の立場に立つものでありますが、善それ自體は、元來一善でありまして變化するものではない譯であります。そして、この立場に立つた時は頓悟が出張され得る道理であります。この漸悟と頓悟の基盤と云ふべきものを、太子は勝鬘經義疏一乘章にお示しになってをられるのであります。それを左に掲げて見ました。

勝鬘經義疏一乘章(太子釋)

(一)若論收會會三善廢三教破三執……………(漸入の基盤)

(二)善即今昔雖殊即是一善理無可會……………(頓悟の基盤)

一應、右の如く、頓悟、漸入の基礎としての解釋を試みたのであります。右の如く、「理として會すべきこと無し」と云ふ理の上から善の根本問題に觸れてゐる事は、勝鬘經に對する太子の態度と見做して良いと思はれる點が見受けられるのであります。太子は充分頓悟思想に對して御理解をもつてをられたのでありますが、勝鬘經は頓悟思想を代表する經典であると云ふ考へ方を持ったものではなく、單に頓悟思想を説く處が見られると云ふ程のものである様です。

私が、太子の頓悟思想を深し求めてゐるうちに、頓悟思想の基盤としての理そのものが、問題の上に移つて來まして、太子としてはむしろ、勝鬘經の中心課題は「理」そのものにあつたのではなかつたかと云ふ様に、換言しますと、勝鬘經は「理」の經典であると云ふ態度が浮かび舉がつて來たのであります。